生命科学がひらく大阪・関西の未来

今年1月8日実施の本鼎談にご参加いただいた岡田善雄氏が、1月16日に急逝されました。今となってはご生前最後のお言葉となってしまいましたが、本鼎談でのご発言を重く受け止め、今後の大阪・関西の発展に尽してまいりたいと思います。心からご冥福をお祈りいたします。

出席　岡田善雄（千里ライフサイエンス振興財団特別顧問／大阪大学名誉教授）
中村桂子（JT生命誌研究館館長）
進行　堀井良殷（大阪21世紀協会理事長）

連携して競い合う

堀井　今回は、世界で初めて細胞融合に成功し生命科学の父と呼ばれる岡田善雄さんと、JT生命誌研究館館長として多彩なご活動をされている中村桂子さんに、生命科学分野における大阪・関西の優位性、あるいは存在感といったお話を中心に伺います。すでにお二人が大阪におられること自体、世界に大きな存在感を示しているものと思いますが、まずは岡田さんから。

岡田　関東と関西の生命科学研究のしかたはずいぶん違います。ひとことで言えば、関東はインターナショナル。世界の動きに敏感で対応も早い。関西は世界の動きとはあまり関係なく、やりたい研究をするというのが伝統的です。以前、有馬朗人さん（元東京大学総長、文部大臣）から、「なぜ関西はバイオに強いのか」と言われたことがありました。思うに関西にとってありがたいのは、大阪大学と京都大学と神戸大学が非常に近いことが上げられます。そうした距離的なメリットに加え、研究者の相互交流も活発です。例えば阪大の審良（あきら）静男教授（自然免疫学）の研究に京大が大きな関心を寄せたり、アポトーシス研究の第一人者である長田重一教授が、阪大から京大へ研究チームごと移籍するなどといった例は数多くあります。大学双方で研究競争をする反面、一緒にやったほうが得だと思ったらお互い力を合わせる。研究の芽を生む大学と育てる大学、それぞれ特徴のある大学が連携しやすい環境は、生命科学の進歩にとってとても好都合です。関西にはそうしてバイオテクノロジーを発展させてきた歴史がありますし、今後もそうしていくでしょう。千里ライフサイエンス振興財団が入っている千里ライフサイエンスセンタービルが完成したとき、生命科学の発展のためには、大学どうし競合すべきは競合し、助け合うべきは助け合おうという思いから、大阪大学・京都大学・神戸大学のトップ会談を記念企画しました。そこで呼びかけたら、金森順次郎さん（阪大総長）、井村裕夫さん（京大総長）、鈴木正裕さん（神大学長）が揃って駆け付けてくれた。こうしてすぐ集まってくれるというのも、関西の面白いところですね。

中村　どんな人がどんなことをしているのかを知らないと、良い研究が見えてきません。JT生命誌研究館で発行している機関誌では、生命科学分野でパイオニア的研究をされている方を毎号取り上げ、優れた研究者はどんな子ども時代を過ごし、どんなお仕事をなさってきたかをご紹介しています。すでに55人のサイエンティストライブ